

# 郷土博物館・文学館だより

白根記念郷土文化館は  
博物館と文学館が一緒になって  
新しい館に生まれ変わりました



白根記念渋谷区郷土博物館・文学館

当館は、渋谷区議会議員であった故白根全忠氏より、宅地・邸宅の寄贈を受け、昭和50年に開館した「渋谷区立白根記念郷土文化館」を前身とします。平成17年7月に全面的に建替え、新たに文学館を併設する形で、リニューアルオープンしました。地上2階、地下2階の建物で、2階は渋谷の先史～現代までの博物館展示、1階は特別展示室、地下2階は渋谷ゆかりの文学者を紹介する文学館展示です。

2階の博物館展示では、ただ展示を見るだけでなく、本物の縄文土器に触れ、それを手本に粘土の上に、縄文の模様をつける体験ができたり、江戸時代の道具（実物）に直接触ることができるコーナーもあります。さらに、戦前の住宅再現は、実際に室内に上がり、当時の道具が並ぶ中で、時代を体感できるようになっています。



昭和初期の住宅再現展示（2階博物館展示）

地下2階の文学館展示では、渋谷にゆかりのある国木田独歩・与謝野晶子・田山花袋・三島由紀夫・志賀直哉・平岩弓枝など多くの作家の直筆原稿や手紙、初版本などが展示されています。また、渋谷で生涯を過ごした文芸評論家で、多くの文学者たちと交流があった、奥野健男の書斎の一部を、生前そのままの形で再現展示しています。

また1階にある特別展示室では特別展や企画展を年数回開催するほか、地下1階にある多目的室では文学講座や講演会、体験学習講座などを開催します。

## 渋谷にいたぞう ナウマン象

JR 原宿駅の改札口を出て、明治神宮の方向へ進んでいくと、JR の線路をまたぐ二つの橋があるのをご存知でしょうか。一つは昭和 39 年（1964）に開催された東京オリンピックの際に架けられた橋、五輪橋です。もう一つは、大正 9 年（1920）明治神宮が鎮座した際に架けられた神宮橋になります。

さて東京オリンピック開催から 7 年後の昭和 46 年 4 月、ちょうどこの神宮橋の真下、地下約 21m のところで、ある事件が起こりました。

この頃、この付近は地下鉄千代田線の敷設工事が行われていました。工事は、現在の代々木公園駅方面から明治神宮前駅方面へ、シールド工法というやり方で掘っていました。ちょうど神宮橋の真下を掘っていたところ、何かの化石が偶然発見されたのです。急ぎよ、上野にある国立科学博物館に調査を依頼し、その化石が何であるかがわかりました。化石はナウマン象でした。今から約 10 万年前の象の牙や臼歯など、ほぼ一頭分が見つかったのです。

でもなぜ、今、日本に生息していない象の化石が出てきたのでしょうか。

実は、かつて日本列島が南と北で大陸と陸続きになった時期があったからです。今から 20 ～ 1 万年前ぐらいまでの日本は氷河期で、気温が低く、海岸線は現在よりもずっと後退していました。そのため日本列島は大陸とつながった時もあり、大陸の南からはナウマン象、北からはマンモス象が移動してきたようです。ナウマン象は日本では今から 20 ～ 2 万年前ぐらいまで生息していましたが、約 2 万年前に急激に気



北青山遺跡から出土した  
ナウマン象の臼歯の化石（重量 455 g）

温が低くなり、日本では絶滅してしまいます。平均気温が今よりも約 7 度も低かったようです。

またこのナウマン象ですが、分類では長鼻目エレファス（ゾウ）科ハレオロクソドン属に含まれます。学名は *Palaeoloxodon naumanni*（MAKIYAMA）です。明治時代、日本政府に招かれたドイツ人の地質学者、ナウマン博士にちなみ、和名がつけられました。

さて渋谷で発見されたナウマン象の化石は、神宮橋だけではありません。かつて都電の車庫があった神宮前五丁目にある北青山遺跡で、ナウマン象の化石が見つかりました。場所は意外なところでした。遺跡内で江戸時代の井戸を調査している際、地表から約 15m 付近でナウマン象の臼歯が発見されたのです。

世界の有名ブランド店が建ち並ぶ原宿表参道・青山界隈も、今から約 10 万年前には象が歩いていたなんて、ちょっと想像すると楽しいかもしれませんね。



## 詩集『抒情詩』は、渋谷の住人 独歩たちから生まれた詩集

渋谷ゆかりの文学者のひとり、詩人・小説家・ジャーナリストの国木田独歩は、明治4年（1871）7月15日に現在の千葉県銚子市に生まれました。本名は、幼名を亀吉、のちに哲夫といます。青年時代に、徳富蘆花の兄徳富蘇峰主宰の民友社が発行していた「国民新聞」に寄稿した縁で、「国民新聞社」に入社します。

独歩と渋谷にとって、蘇峰の主宰する民友社は深いつながりがあります。独歩は周囲の反対を押し切って佐々城信子（有島武郎『或る女』のモデル）との結婚を望み、蘇峰は独歩の保証人となって、二人は新婚生活を送ります。しかしまもなく破綻し、傷心の独歩は明治29年9月4日（『欺かざるの記』）、当時まだ東京の郊外だった渋谷に逗子から移り住みます。その頃の様子を以下のように書き記しています。

七日／吾が身今は渋谷村なる閑居にあり。家は人家はなれし処に在り。

六日は昨日日曜日、（略）午後一時頃宮崎湖処子君来足りぬ。

とあります。この独歩の家を、のちに渋谷に住む田山花袋が同じ年の11月の末に訪ねています。（『東京の三十年』丘の上の家から）

東京の近郊によく見る小春日和で、菊などが田舎の垣に美しく咲いてゐた。太田玉茗君と一緒に湖処子君を道玄坂のばれん屋という旅舎に訪ねる、生憎不在で、（略）路

はだらだらと細くその丘の上へと登ってゐた。斜草地、目もさめるやうな紅葉、畠の黒い土にくっきりと鮮やかな菊の一叢二叢、青々とした菜畠一ふと丘の上の家の前に、若い上品な色の白い瘦削な青年がちっと此方を見て立ってゐるのを私たちは認めた。

ここに登場する国木田独歩、田山花袋、宮崎湖処子、太田玉茗らは、柳田国男も加わり、翌年の明治30年4月に詩集『抒情詩』を発行しました。渋谷に没するまで住んだ民友社記者・思想家の山路愛山（やまじあいざん）の序文も加わって民友社から発行されました。今まで雑誌などに発表された作品も含めて編集した、縦8cm×横13cmの、葉書の半分の大きさくらいでしょう。この小さな詩集には当時の新体詩に大きな影響を与えた独歩の「独歩吟」が収録されています。



『抒情詩』 明治30年4月 民友社発行



収蔵資料紹介

## 「東都青山絵図」



江戸時代後期、江戸ではいくつかの切絵図が刊行されましたが、尾張屋から出された切絵図は、多くの色で刷られたことから、その中でもとくに人気が高かったものでした。その絵図は江戸を31の地域に分割して刊行されましたが、ここで紹介する「東都青山絵図」は現在の青山から渋谷区東部にかけての範囲が収録されているもので、嘉永六年（1853）の刊行です。

武家地の部分をみると、名前

の他に家紋が入っている敷地が目に入ります。これは大名屋敷のうち、藩主などが住む上屋敷をあらわしています。この絵図の中の渋谷区域部分では「松平左京大夫」の屋敷のみ家紋が入っています。ここは現在の青山学院大学のあるところで、元禄八年（1695）から幕末まで伊予西条藩松平家の上屋敷がありました。渋谷は江戸の中心部からはずれていたため、このように上屋敷はほとんどありませんでした。

どうした切絵図は、江戸の人

### 【今後の展示予定】

#### 企画展「新収蔵資料展」

3月7日(火)～4月9日(日)

\*平成17年度中に収蔵した資料の一部を紹介します。

#### 企画展「広尾むかし写真展」

5月上旬～下旬

\*昔の広尾地域を撮影した写真を展示します。

#### 特別展「奥野健男展」(仮称)

6月中旬～7月下旬

\*渋谷育ちの文芸評論家奥野健男の生涯をたどります。

### 白根記念

## 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) / 小中学生:50円(40円)

※( )内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.1

平成18年3月1日発行